

子供は蚕棚の下に寝かされた。また、上簇じょうさく（蚕が繭まゆになること）ともなると、屋根裏の「たか」まで上つて寝ることもあった（『十九歳の養蚕教師・福丸』。最初のころ、桑は立ち木で、これにのど自慢の男性が登り、桑扱さくきをしながら民謡や歌謡曲を歌うという独特の風物詩がみられ、男女の恋さえ芽ばえたという。これも、蚕の増加により、大正期から「刈り桑畑」に変わっていった。

飼育と労働

養蚕の飼育内容については、『わたしたちの竹野町ーくらしのうつりかわりー』（社会科資料）に詳細に紹介されているので、ここでは省略するが、

養蚕回数こは春蚕こ・夏蚕こ・秋蚕この三回ほどのものであった。寒くなると、蚕も繭まゆを作らなくなるので、適当な温度と乾燥を必要とした。そこで、炬たきを作り薪や炭で部屋を暖める。その他、桑の刈り取り、成長に応じた蚕の世話こな、繭の出荷など、田畑の作業の間にこれらの仕事を熟こなさなければならず、多くの手間と人手を必要とした。これには、全家族が従事したが、大部分は女性や子供の労働力に支えられていた（『南地区の養蚕』小川喜幸、『万年青のうつりかわり』同前、図17）。しかし、人手の無い家は、蚕を飼うことが出来ず、桑だけを作つて、桑の無い家に売るといふことも行なわれた（『明治の古里物語』達富寿夫）。

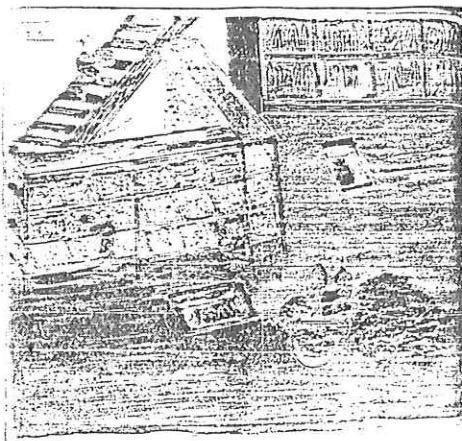


図17 養蚕の飼育風景（『明治の古里物語』達富寿夫）

## 養蚕と信仰

このように、竹野谷と養蚕の関係が密接であったことが分かる。そこで、病気にもかからず、出来るだけ多く品質の良い繭が取れることを望むのは、村人として当然の帰結である。ここに、いろいろな民俗信仰が起った。

早いところでは、椒下村の乳原五右衛門氏（明治四十四年生）が父上（安政年間へ一八五四―五九）生）からの聞き書きでは、明治初期ごろまで檮椒神社に山椒の油とともに繭玉を献上していた。また、竹野谷の養蚕が盛んであった大正・昭和にかけ、初午には米の粉を使って繭団子（繭玉）と杵糸の形にしたものを供えた。

一番多く信仰されたものが、「お猫さん」といって、前掲海と黄帝信仰でも紹介した床瀬の奥の「狗留孫仏」と呼ぶ二〇日前後の巨岩である。この岩片を持って帰って、蚕室に祀ると、鼠除けになり養蚕が終わるとお礼



写59 狗留孫仏小祠の岩片（床瀬）

参りとともに返したという（写59）。旧四月二十八日と同九月二十八日が祭日で、娘たちが晴着姿で参詣したという（『わたしたちの竹野町―くらしのうつりかわり』『万年書』第十卷第四節「狗留孫仏と桃溪甫仙和尚」第十一号 第十卷第四節「狗留孫仏と桃溪甫仙和尚」参照）。

同じ事例は、「城崎の神水神社、絹巻神社におまいりしてお札をもらってくる。このお宮の床下は海になっている。そこから石を持って帰る。この石をオネコサンといい、半紙に包み、水引をか

けて蚕室に置く。これはねずみが蚕を食べないようにとのまじないである。

翌年お宮にある別の石と交換してくる」(「奥但馬の民俗」兵庫県養父郡大屋町大字茂  
「東京女子大学民俗調査、昭和四十六年」)と報

告されている。しかし、この説明は、現地再確認調査によると、神水神社(豊  
 岡市田結)のことで、それも現在の鎮座地に遷宮する前地の話である。ここ

では、蚕がはるか彼方の海から流れ着き、前地の鎮座地に祀ったという伝承  
 である。絹卷神社(但馬五社、豊岡市気比字絹卷)も、確かに社名のごとく、

養蚕の神として信仰され、お札も出している(写60)。

また、養父神社(養父明神、養父郡養父町養父市場)についての記録に、「広前の小石を頂き帰りて、蚕の  
 傍に置いて鼠を除る守護とす。是を猫石といふ」(「龍雷神人幸人秘訣云」「養蚕秘録」上巻・上垣)とある。これは、境内社

加遅屋神社(通称、猫の宮)のことで、「ネコメイシ」と称して、軽石のような穴のあいた小石を二つ連ねた  
 のを奇麗に洗い、神官の祈禱をうけ持ち帰ったという。但馬一円に広く、蚕と猫石と鼠除けの民俗信仰が流布

していたことが分かる。

### 第十節 染・織

#### 染屋

須谷に、上紺屋(現・谷垣博宣)、下紺屋(現・田中博之)、茜屋(現・津田喜一)と呼ばれ  
 た染屋があった。大正七年(一九一八)ごろまでは、壺があり藍あゐで布を紺色に染めたり、茜あかね  
 で染めたりしていた。また、下町の小林喜平家(現・万太郎、屋号・喜平)も、傘屋の隣で染物屋をしていた



写60 養蚕守護札  
 (養父神社・絹卷神社)

(『竹野郷外史』(一)、「大正」初期の浜の子ら」北条正次)。

### 機織り(麻)

機織りには、麻織り・木綿織り・絹織りの三種類があり、昔はすべて衣類は自給自足であったので、女性の大切な仕事の一つであった。ここでは、古くから但馬の産物であって、竹野谷でも広く普及していた麻を取り上げてみよう。

麻は、山桜の咲くころが種蒔きの時季であった。椒の檜椒神社下に、推定樹齢五〇〇年といわれる大桜がある。この桜の花の咲く時季に、麻を蒔くと良いといひ伝え、「麻蒔桜」(町指定文化財)と命名されている。

そこで、「麻町」(麻)に麻の種蒔きをし、養蚕や田植えが終わると刈り取り、干した後、両手で握れるほどの大きさに束にする。そして、村の決められた苧蒸し鍋に入れ、上から苧桶ですっぽり被せ、一時間ほど蒸す。蒸し上がり、柔らかくなった麻の皮を剥ぐが、これを「粗麻」という。次に、この粗麻を良く乾燥させ、再び「緒蒸し」といって、灰を入れた釜に入れ蒸す。充分柔らかくなったら、川で「緒扱き」と称してしごく。汚れが取れたら、「緒」という白く綺麗な繊維が出来上がる(図18口絵写真参照)。この緒を乾かし、秋の取り入れも終わり、田畑の仕事も一段落したころ、細く分けた緒を指先きに灰を付けながら繕って繋いでいく(苧績)。これを糸車

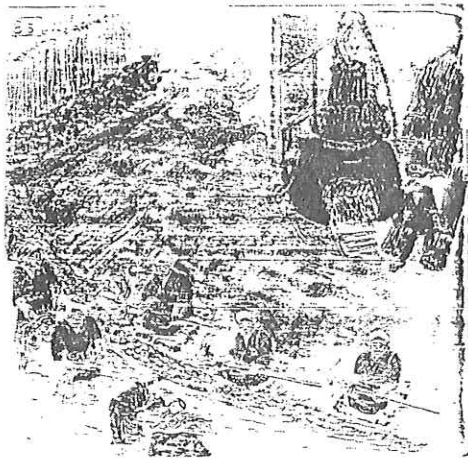


図18 麻作り風景(『明治の古里物語』達富寿夫)

で「綴ね」<sup>つづ</sup>「棹」<sup>かせ</sup>にし（これを集める仲買人もいた）、さらに糸車で「繕り」<sup>よ</sup>を掛けながら紡ぐと麻糸が出来上がる（『麻の一代』河原操、第七号）。なお、茎の部分は麻幹<sup>まがら</sup>といい、茅屋根の下地に使用された。その他、お盆の送り火・迎え火・愛宕の万灯・簀子<sup>すこ</sup>などにも用いられた。こうして出来上がった麻糸で織ったものが、帷子<sup>かたびら</sup>・蚊帳・パッチ・甚平・網・網・帆布などになった。

## 第十一節 手工業

竹野谷において、農業・漁業の合間に、生活の糧にする手工業として、紙漉・傘骨製造・提灯作り・杞柳<sup>きりやう</sup>作りなどがあり、以下列記していく。

### 紙 漉

紙漉は、養蚕・但馬牛とともに早くから行なわれていて（『通史編』近世編、第三章第一節・第三節参照）、『但馬国新図』（赤木勝之、安政六年）にも名産として竹野谷紙を記しているくらいである。

これは、冬の農閑期における現金収入の一つで、機織り同様女性の労力によるところが大であった。次に、富森一雄氏（楳中村、大正二年生）の記録による紙の製法のいったんを紹介する。

秋の終り十一月から十二月の初めにかけて楮<sup>こうぞ</sup>・三楮<sup>みつまた</sup>を伐<sup>き</sup>る。持帰り、土間の一隅に設けられた釜に入れ、丸い大きな直径約壹<sup>メートル</sup>米、高さ二米余の桶を冠<sup>むす</sup>せて蒸し上げる。皮を剥<sup>は</sup>ぎ、楮撫<sup>かじな</sup>でと言つて皮の上皮（黒い部分）を、小さな刃物で撫で落し、更に川の水に素足で踏み、揉<sup>も</sup>みつけて汚れを落し、雪の上に広げて天日に晒す。雪に晒して後、灰を入れて煮る。これを川水で洗い、俎<sup>まないた</sup>の様な台の上で、小さな棒で叩きドロくにする。これを桶に入れて、水とサナと称する木の皮をドロくとした物と混ぜ合わせる。この

溶液を、細いすだれ簾の入った方形の枠ですく掬い上げる。これを一枚々々板に（幅三〇センチ余・長さ二一米余）張りつけて、天日に乾す。

冬になると川を取り込んで、共同の藁がこいの小屋が建つ。その中で、素足で、流れる水の中、石の上で楮の皮を踏みつけ、揉みつける。朝は早くからテン、テン楮の皮を叩く音。雪や雨の降る日、家の中、イロリの周囲には、紙を張りつけた板が立ち並んでいた。

（「紙漉きについて」研究）  
史料「近世庄屋の文書」

と、大変な手間と苦勞が偲ばれる（図1920）。これも大正初期ごろまで続けられていたが、次第に衰え、木炭の生産へと移行した。昭和三十五年（一九六〇）ごろ、最後に残った小城の一軒も止めてしまい、竹野谷から全くその姿を消してしまった。

### 傘骨製造

傘骨製造は、明治二十五年（一八九二）桑野本へ移住した森垣右馬太郎氏が始めた。原料の竹販売し、桑野本を中心に冬期副業の現金収入として、これに従事する家も増え、六地区二六戸となり、今なお普及する傾向にあると、『村勢調査書』（奥竹野村）は記している。大正十一年（一九二二）には、桑野本傘骨製造組合を結成したり、末期には手削りから機械削りになるなど、東は峰山および網野付近、南は八鹿・養父・村岡方面、西は浜坂・諸寄付近まで販路を伸ばしていった。しかし、昭和三十年（一九五五）ごろより、洋傘の急激な進出により、ついに消滅していった（「傘骨について」三輪英）。

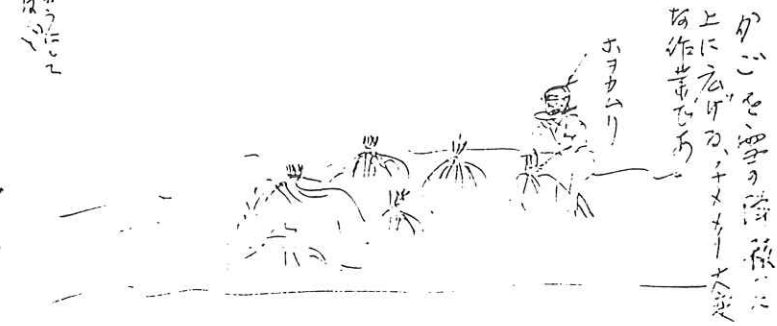


図19 紙漉風景〈1〉(『我古里』達富寿夫)

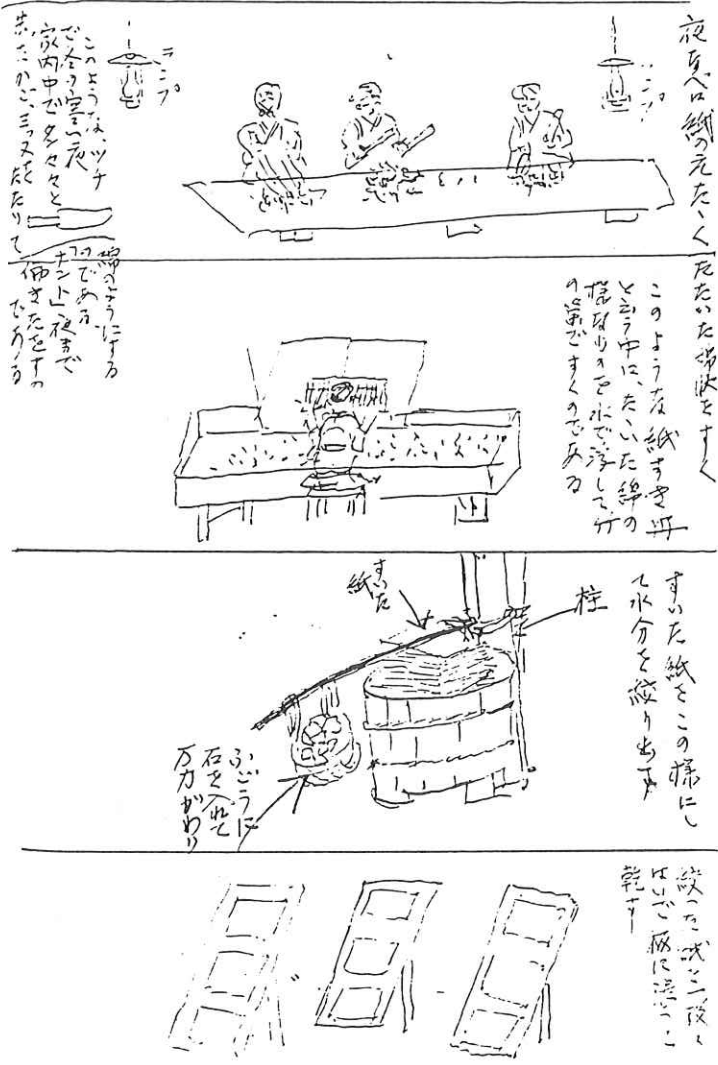


図20 紙漉風景〈2〉(『我古里』達富寿夫)



提灯作り

なお、傘骨製造と関連して草飼の故米田道太郎氏は、城崎で提灯作りの技術を取得し、一生この仕事に捧げた。竹野町では、米田氏一人であったし、兵庫県下でもこの技術を伝えている人は少なく、極めて貴重な存在であった。後継者が無いのが惜しまれる。

杞柳作り

豊岡を中心に産出される、行李・バスケット・籠の原料となる杞柳を柳田でぞだて、皮剥ぎをして卸店へ渡していた。年代不詳であるが、『村勢調査書』（奥竹野村）は、五十年前は微々たるものであったが、「順調ニ増加シ、現在作付反別者、一町歩六千余貫（乾）ヲ産スルニ至レリ」とする。

柳の皮剥ぎは、四月下旬から五月上旬ごろに行なわれるが、その様子を『大正初期の浜の子ら』（北条正次に、

田から柳が運ばれ、柳へギ（削ぎ）が始まっていました。小母さん達は、手の甲にケハン（削半）をつけ、女竹の二つ折れにしたのを右手に持って、柳を元から末にしごとと、青々とした柳の皮ははじけ、ばらりと下に落ちます。しゅっしゅっと音を立てて皮をとりました。白い柳は地面に積まれて、乾かされました（中略）。柳は、一貫目何銭と日当が払われました。小学生も、日曜は柳へギ（削ぎ）の仕事をしました。

と、大正初期の思い出として紹介している。小物などに使う細い柳は、少量しか出来ないもので、太い柳より値が高く売れたという（『明治の古里物語』達富寿夫）。

以上、いくつかの手工業をみてきたが、生産構造の変革で、安く多量の物が出来る時代となって、素人が自らの手で物を生産していくという姿勢がすっかり崩れてしまった。しかし、我々はこうした先人の創意工夫と苦勞を、長く子孫に語り伝えなければならない。

表1 但馬主要鉱山生産額表  
 (『但馬読本』兵庫県立豊岡中学校郷土研究会より)

主要産町村	主要鉱山	年産額	主要産物とその産額
養父郡南谷村	明延鉱山(錫)	七・一三九・三二七円	九十九%まで錫
朝来郡生野町	生野鉱山(銅)	一・九〇三・九三一	銅鉱山が一五八萬円を占む
城崎郡口佐津村	但馬鉱山(金)	五〇五・四三〇	金製品二十二萬円・銀製品十萬円・銀鉱石十八萬円
出石郡神美村	沖浦鉱山(金)	一七五・四四二	金製品十五萬円・銀製品一、七萬円
城崎郡竹野村	神谷鉱山(金)	一一二・六〇〇	金銀鉱石一、二萬円
美方郡小代村	竹野鉱山(金銀)	六六・六一九	金鉱石四、二萬円・金銀鉱石二、四萬円
養父郡関宮村	玉代鉱山(金銀)	五〇・七四六	全部金鉱石
朝来郡山口村	中瀬鉱山(金)	二一・三九二	全部銅鉱石
城崎郡中竹野村	神子畑鉱山(銅)	一一・四〇〇	全部金銀鉱石
	轟鉱山(金・銀)		

第十二節 鉱業(鉱山)

竹野谷鉱山の盛衰  
 竹野谷の鉱業は、近世以前から開発され、段鉱山・金原鉱山(美含鉱山)・銅山銅山・三原<sup>あかがねやま</sup>山銅山・三原鉄山等は、遺跡・史料・伝承からその存在が明確である(『通史編』近世編、第三章第三節参照)。

『但馬読本』(兵庫県立豊岡中学校郷土研究会、昭和十四年)は、「昭和十年の兵庫県の鉱産総額は一千万円に達し、鉱産に比較的恵まれない近畿七県中一頭地を抜いている。而もこの一千万円中の九十パーセント以上が我が但馬五郡に産出するのである」として、次の統計を挙げている(表1)。

このように、近代以降も、美含銀山（鬼神谷・銀）・竹野鉾山鬼神谷坑（鬼神谷・金銀）・竹野鉾山阿古谷坑（轟・金銀）・竹野鉾山奥虫谷坑（下塚・金）・鶴峯鉾山（奥須井・金銀）・竹野鉾山長瀧坑（奥須井・金銀）等、明治・大正・昭和の竹野谷の鉾業史を飾ったが、昭和二十三〜四年（一九四八〜四九）を最後に竹野谷からその姿を消した（『通史編』近・現代編、第二章第一節・第三章第二節、『文化財編』・町指定外各参照）。現在、わずかに当時の片りんの聞き書きが出来た。例えば、銅山は近代に至り、大正初期銅山字四軒家において、一時期銅の採掘があつたが、鉾脈が細く昭和に入って十〜十五年（一九三五〜四〇）の初期に閉山したという（『銅山村と鉾の鉾山』富樫 雄）。また、奥須井長瀧の金銀鉾と、下塚の東大谷鉾山（奥虫谷坑・金鉾）が盛大であつて、昭和十三年（一九三八）ごろ、働きにいったという（『私の少年時代の思い出話』田 中丑之助、『万年青』第四号）。さらに、中竹野の竹野鉾山に、農業の合間に女性をも含め出稼ぎにいった。なお、川南谷に踏鞴鉄を産したという。このように、産出はぬきんでて多量とはいえないが、数多くの鉾山に恵まれていた。しかし、こうした宝の山の資源も無限ではなく、いずれ掘り尽したら閉山という憂きめにあう。竹野谷の鉾山も、一時期富をもたらしただけであらうが、今は単にその跡と昔物語を残すだけである。

### 第十三節 諸 職

#### 大 工

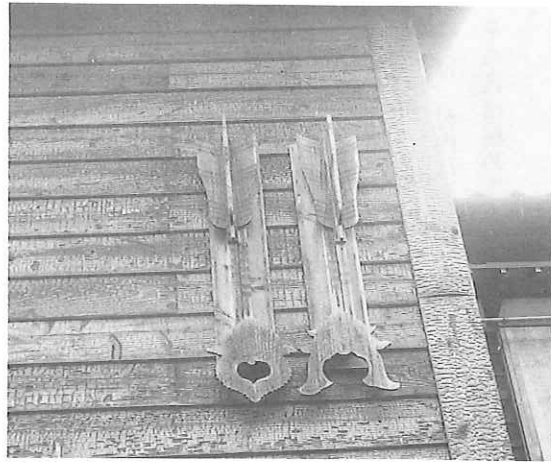
江戸時代の竹野谷の大工（家大工・宮大工・船大工）は、村内は勿論、村外の神社・仏閣の建築にも携わっており、組み物・彫刻に至るまで、その技は極めて高い水準にあつたことは、

『通史編』（近世編、第三章第四節参照）で既に触れた（写61）。

しかし、建築物も一度建てたら、火災とか災害などに遭わない限り、長い年月に耐えることであり、一年に村内で一、二軒の新築があれば良い方であったという。こうして、昭和初期から終戦ごろまで、国内ではいろいろな方面の職業の人が夢を抱いて大陸へ渡っていった。竹野谷の大工の数人も、朝鮮・中国へ出稼ぎという形で活躍したという。

江戸末期から明治期にかけての竹野谷の大工は、浜（一八人）・草飼（一人）・須谷（一人）・小丸（一人）・阿金谷（八人）（『竹野郷外史』<sup>〔二〕</sup>）で、平成元年三月現在は五九人（組合加入者に限る）となっている（竹野・川西熊次郎提供）。やはり、他の町村に比べ多い方であろう。また、船大工も明治期には六軒あって、その内最近まで一軒だけが営んでいたが、現在は止めてしまった。

伊垣美之助氏（明治四十一年生）<sup>〔一九〇六〕</sup>が、一人前の大工になるまでの回顧録を記しているので紹介（要略）する（『自己の回顧録（正・号）』、『万年書』第九・十号）。「当時、大工になるには、まず大工見習として、親方につかなければならなかった。これは、六カ年の修業期間であり、見習中は給料は無く、盆・正月・祭礼時に、小遣いとか（年期が重なるにつれ、五分作とか七分作とかで上がっていった）、心付けの品物等だけで、年期の終わりころには、一人前の賃金は親方取りであった。休みも、同じく盆と正月・祭礼時ぐらいで、日常の寝泊まりも仕事場であった。そ



写61 神社棟上げ式使用の破魔矢（竹野浜）

して、大工仕事の習いも、手取り足取りに教えてもらえるのではなく、いわゆる盗み習いという厳しい修業生活であった。

こうして、六カ年の修業年期明けとなると、初めて自由の身となり、技術的にも経済的にも独立し、責任も重くなる。年期明けには、満期披露の宴が親類を呼んで開かれ、竹野の大工連の太子講に初めて仲間入りが出来、清酒一本、「豆腐五丁を印しるしとして持参する」とある。

また、竹野の元船大工の船野利正氏二九三三（昭和七年生）も、「十三歳ほどで弟子入りし、五年間奉公があつて、二年間が礼奉公（益・正月に小遣い程度）であつた。その後、二十歳ほどで、道具一式とかみし袴かみしが親方から与えられ、年期明け披露がある」とも話している。

なお、大工の「太子講」であるが、大工の守護神とする聖徳太子の掛軸を飾り、大工仲間が順番に宿をしながらか集まり、祭事と飲食をし、日当を決めることもあつた。しかし、太子講が次第に行なわれなくなると、この講が基盤となつて組合が作られていく例も多くみられる。ここに『正徳大士太子講コヲ連中日記帳』（明治二十五年旧正月吉日森本・井越武三蔵）の講帳が存する。これには、竹野谷の河内・御又・森本・小城や他村の回り持ち宿を勤めた大工の氏名、この日に集まつた賽銭の金額、米・酒・食料品などに掛つた費用とその割り当てが認められている。

## 木 挽

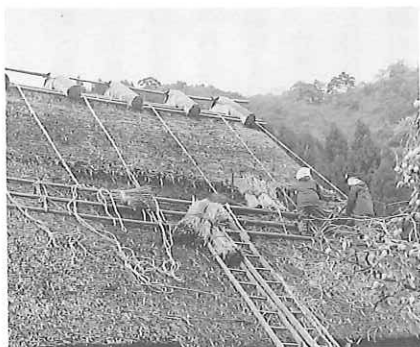
木挽は、大工とともに竹野谷の主要な技術職で、江戸時代からその活躍が顕著であつたことは、『通史編』（近世編、第三章第四節）で既に紹介した。

江戸末弘化年間（一八四四〜四七）の木挽として、浜（三人）・芦谷（三人）・松本（一人）・羽入（一人）・

轟（一人）・その他（四人）を挙げているが（『竹野郷外史』<sup>〔二〕</sup>）、明治以降も、阿金谷・羽入・松本・小丸・浜須井・奥須井等に木挽をする人がいた。例えば、浜須井では本業としてゐる人が四〜五人で、副業としては全戸に及んでいたという。

田植えが終わると、奥の谷で松・杉（大・小・割り木の木材）を切り、皮を剥いて少し置いておき、川縁まで出し、川流しをして自分の家の近くまで流す。木材には、各家の屋号の焼印が押しであり、区別がついた。そして、川出しと称し川から引き上げ、自分の家で板を挽く。それを浜へ出し、船主に売り船で多く越前若狭へ運ばれたという。段でも、以前は松を板に製品化して、豊岡方面へ持ち出して収入にしたこともあったが、明治の終わりのころから白炭の生産へ移行していったという。竹野谷の木挽は、腕がよく名も売れ、大工に指示をしたほどの力があって、注文も多く但馬一円、丹後の火事場跡を歩いて、木挽に出かけたという。

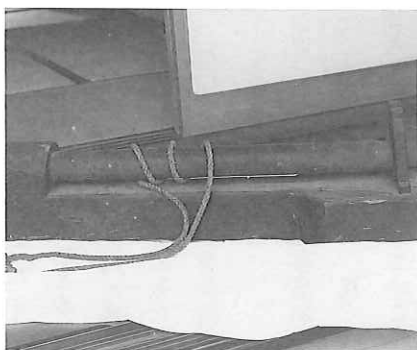
ここで、先祖が木挽であった井垣力馬氏が、「五代弥兵衛のこと（その一・二）」（『万年青』<sup>〔一〕</sup>第十一期）と題して、いろいろ紹介しているので、以下要略して記す。「この五代弥兵衛は、本業は木挽・材木商で、但馬の外にも出て広い地域で取り引きをしていた。特に、但馬各地の神社・仏閣等の用材の調達に関係していた。そして、多くの男衆を雇い、『男部屋』に常時宿泊させ、板材や角材を挽いた。新しい職人が挽いて失敗した、上下で厚さがちがう板や、寸法の曲がった材木が多く残っていたという。なお、この弥兵衛家の正月の飾りは、床の間に五ほど太い麻綱を巻き、その中心に木に打ち付けて引っぱる三〇センチの大輪の付いたくさび形鉄『トチ鉄』を置いた。壁には、弥兵衛が大木を伐り出す時、木の上に立って木遣音頭を歌ったが、その折りに着けていたという、麻綱で挟んだ蓑を掛けた」



写62 屋根葺き (下村)



写63 木地坏 (産霊神社・二ツ家)



写64 木地屋使用の轆轤  
(川見時造提供・日高町)

こうした木挽も、木材流通の新しい波、製材所の開設を機に、急激に姿を消していった。  
屋根葺き 草飼の特殊な職工として、藁や茅で屋根を葺く草屋根葺きがあった(写62)。一時は、一二軒(屋根屋) 二〇人ほどがいて、弟子なども取り、日高の西気、奥竹野へ仕事にいった。これも、江戸末から明治にかけ瓦屋根に移行し、次第に姿を消していくことになる。浜には杉の木を剥ぐ杉板屋もあった(『大正初期の北条正次』)。

木 地 屋 竹野谷の神社を参拝していると、時々木地で作られた高坏や坏・盆などが、何の変哲もなく置かれていのにぶつかる(写63)。恐らく、かつて竹野谷に多く散在した木地屋たちが奉納したものであろう。

これに関しては、『通史編』（近世編、第三章第四節）で一部紹介した。木地屋も、実際轆轤を使って、椀・盆・杓子などを作っていたのは、幕末ころまでであろう（写64）。明治維新の時、政府の地租改正による「地券」（土地証券）発令で、各地の山の八合目以上は木は切り放題という特権も消滅し、山の資源の枯渇・機械工業の発達にともない、次第にその姿を消していった。現在、竹野谷で木地屋は全くみられず、子孫の人たちも他へ移住したりして、先祖の生活ぶりをすっかり忘れてしまっている。ただ、三原山木地屋の名工林兵衛の曾孫加悦まつ氏が、今日でも同地に住しておられる。

竹野谷の木地屋で特筆されるのは、やはり、この三原山の奥の木地屋村であろう。江戸時代の幕藩制の浸透と村落確立により、木地屋も組織・定住化した。そこで、『但馬の木地屋』（神戸新聞出）（版七ノタリ）を出版され、長くこの方面の実地調査・研究をされてこられた川見時造氏に御指導頂き、以下氏の成果に基づいて報告していこう。

三原山の木地屋は、かつて三カ所（マボ谷〈本谷奥〉・逸ヶ成・三原水山）に居住しており、明治末までマボ谷には五軒存した。このマボ谷の通称ガケガ平なという所に、二五基の木地屋の墓跡と、「法室是光信女、文化十三年九月十六日、三原木地師吉右衛門母」の石碑一基がある（写65）。しかし、明治四十二年（一九〇九）の旧正月十六日の雪崩で、一家五人が全滅した。これ以後、次第に離村・転職で、大正十年（一九二一）残った二軒も生産を止めて山を降り、村は廃村となった。

まず一番目に、延宝六年（一六七八）十一月九日、祖師素覚法親



写65 三原山木地屋二代小椋吉右衛門母の石碑（三原山マボ谷ガケガ平、川見時造提供・日高町）



王（惟喬親王）八百年忌祭に、但馬木地屋の頭領・肝煎として貢献した三原山木地師孫左衛門が注目される。彼は、父喜左衛門の代から三川山を越した西側の小城字瀬越（現・美方郡村岡町小城）を本拠として、本業の傍ら谷間を開墾し、子供平兵衛の晩年これを果たし農民として定住した。

二番目に、先祖が木地屋の祖地近江の八幡系蛭谷公文所の出身で、以後直系の正統派專業木地屋として、明治末期まで三原山に住し、六代に至るまで三川で木地屋を営む小椋豊家（香住町三川・大正三年生）が特筆される。

初代助左衛門は、安永九年（一七八〇）蛭谷の『氏子駟帳』によると、江州高嶋郡釘畑郷能家山に六人家族とともに住し、ここで官途成の資格を受けている。助左衛門の石碑は、七美郡本谷（現・美方郡村岡町小城字本谷）に、「寂翁双林信士、天保十亥年三月八日、小椋助左衛門」とある（現在三川へ移る）。二代目吉右衛門の母の石碑は、前掲ガケガ平の一基である。以後、前掲のように明治中期香住町三川へ移住し、兼業農家として昭和初期まで木地挽をしていた。

#### 青井石工

「青井谷に行く途中に二つの石切場があり、手拭で鉢巻をした石屋さんが石にノミをあてていました。

ハッパをかける時は、宇日・田久日に行く人があるかどうか気をつけていました」（「大正初期の浜」の子ら北条正次）とあるのが、『但馬国新図』（赤木勝之、安政六年）の名産として紹介している「浜切石」である（写66）。

この青井の山石は、細工のしやすい水成岩で、家の土台石・くど



写66 青井の石切場跡（竹野浜）

石・石塔などに使用され、石船（石運搬船）の出現とともに、石工の数も急増してきた。明治三十年（一八九七）代には、東町（三軒）・中町（七軒）・上町（二軒）・馬場町（二軒）・下町（二軒）・その他（一軒）の石工が確認されるとある（『竹野郷外史』<sup>二</sup>）。

#### 水山砥石

『校補但馬考』（<sup>榎井勉</sup>大正十一年）に、「諸磯砥今はまれなり、国中もつはら用いる処は、美含郡桑本村より出る青砥なり、其山の名に因て水山ミツヤマとよふ、其他諸山より出といへども、甚あらし」と

出ている。桑野本より出るというのは誤りで、三原小字水山がその産地であり、木目が細かく評判は良かった。『但馬国新図』にも、竹野谷地方の名産として、「気多郡、水山みづやま砥石」「水山、砥石切場」と出てくる。

三原の田村源一氏によると、大正時代が一番切り出しが盛んであって（三軒従事）、竹野駅まで猫車（荷馬車）で運んでいて、昭和二十二、三年（一九四七、八）ごろまで続いていたという。

#### 酒造

竹野谷の酒造は、江戸時代からみられるが（『通史編』近世編、第三章第三節参照）、竹野川の水は質が良く、茶の湯に適し、特に酒水には良かった。昔は、河内・森本・轟・竹野浜に造

り酒屋があり繁栄し、芳香ある美酒が醸造されていたという（『竹野川の人びとのくらし』山根清治郎『万年書』第十二号）。

### 第十四節 共有地と占有地

#### 入会山

竹野谷には、平地あり山あり海がある。しかし、耕地面積が少ないため、村民の暮らしは当然山と海の幸さきを求めていくことになる。そして、ここではわずかな山野・漁場の入会をめぐって、

山論や漁場争いが江戸時代からしばしば起こっている（『通史編』近世編、第三章第二節・第五章第一節）。

椒中村の富森一雄氏も、「古代より山は薪を伐り、芝草を刈って肥料となし、灰や炭を焼き、山菜を取り、凶年に際しては木の実、草の根を採り、牛を放ち、焼畑を行なって雑穀をとる等、百姓にとつては最も重要な暮しの場であった」(『椒村山論』研究史料)と記し、①百姓の持ち林として所有権の確たる山、②惣山として村共有の山、③所有権はあるが村の百姓が入り込んで働くことの出来る権利(入会権)のある山、の三つに分け、共有地と占有地の区別があったことを紹介している。

現在でも、例えば川南谷・小城・坊岡では、村共有の持ち山を持っていて、村の共有財産となっている。小城では、この資金を積み立て、村の必要経費等にあてたり、賃金などが出た場合は、軒割りに分配するという。なお山菜取りとか栃の実は、山の所有者に占有が認められるが、他は共有である(川南谷)。

#### 入会漁業

興味あるのは、「山の口明」(くちあけ) または山開きともいうが、入会山(共有の山野)への立ち入り採取解禁のことで、切浜では若布とか海苔・藻などの海の解禁日のことを「山の口」と称していることである。山の言葉が、海という言葉として同次元で使用されている。昭和五十―五十五年(一九七五―八〇)ごろまでは、竹野浜・田久日・宇日・切浜・浜須井等、各区の海の境界が嚴重であつて、その境界内でしか採取が出来なかつた。若布は三月二十日、ネジ木で取るもんば切り(藻、田畑の肥料となる)は、三月十五日が解禁日で村中が出た。海苔は一番厳しくいい、入札によつたが、指定地以外は割合自由に取れたという。

以上のように、山にしろ海にしろ、共有地と占有地を設け、採取解禁を厳しくいったことは、資源の保護と利用権の平等化を目差したものであろう。

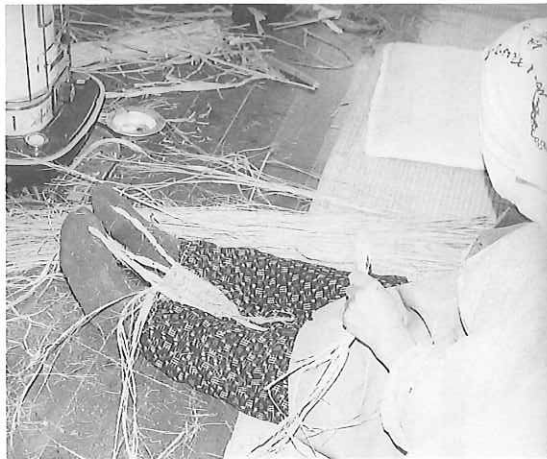
第十五節 労働

内 職

耕地面積の少ない竹野谷では、農業や漁業など一つの專業だけでは生活は出来ず、後述の出稼ぎとともに、いろいろな内職に依存しなければならなかった。雪国の長い冬の季節は、外仕事が出来ず、囲炉裏端で夜遅くまでの室内仕事が多くなってきた、それも毎日のように続いたという。

男性は、草鞋・草履・蓆・蓑・深靴・畚もっこ・オイソ等の藁仕事（写67）、牛の道具、紙漉（河内・小城）、漁船の網（三原、ここの網は強いといわれた）、女性は、機織り（麻・木綿・絹）、麻の糸紡ぎつむ、針仕事、紙の材料楮こうその練り叩き、玄米を精白する米搗うきなどがあつた。その他の内職としては、番傘の骨削り（川南谷・桑野本が多かつた）、柳行李（草飼・坊岡）、鞆（羽入）、板挽き（奥須井）、底引き帆船の手編み縄、藤細工（三原）、民宿の手伝いなどである。

農家と漁家の行商も大きな現金収入であつた。農家は、正月・盆を中心によく大豆・黒豆・米など農作物を豊岡等で売つた。これには、早出・峠越し・三里の道のり・売りの気苦労など大変であつたという（の竹野町にわたりの竹野町にわたり）。  
社会科資料 第二集（一）。



写67 藁仕事（浜須井会館）

## 休日

このように、一年中朝早くから夜遅くまで、毎日休みなく働いていたかという点、前掲農業の箇所でも紹介したが、年中行事の折り目に休むことである。正月・盆・祭礼・サノボリ・八朔・節供などを、神祭りを行なう慎しみ聖なる儀礼日として、休日にし祭礼行事に参加する習わしもあった。

宇日では、臨時に若い衆の意見を聞いて、月に二三日休みを設けることもあった。この他に、何かと口実を付け農事を休むことが多かった。例えば、盛夏の日照り続きに、雨が降れば「うるおい休み」とし、長雨が上れば、「しゅうげん<sup>祝言</sup>休み」と称し安息したという。また、若い衆には「もらい休み」といって、総代に掛け合つて青年だけの休みもあった。しかし、特別の娯楽もなく、誰かの家を宿にして、食事をしながら話し合う程度であった。また、お盆の盆踊りには、各村を踊り渡つて遠出もしたという（『同前』）。

## 出稼

「大正十五年一月一日現在現住者少ナキハ、冬季京阪地方ニ出稼ギノ為メ」で、「毎年四月五月中ニハ復帰」（『村勢調査』<sup>『書』奥竹野村</sup>）するということに、稲の穫り入れも終わるころ、分限者の家で奉公している者も、人手も不必要になり、今度は京阪神・東京方面への出稼ぎが始まる。

竹野谷は、昔から「京働き」（京行き）といつて、冬期に京都へいき稼ぐことが流行していた（半期奉公・百日稼ぎ、江戸時代については『通史編』近世編、第五章第一節、大正・昭和については、近・現代編、第三章第二節各参照）。京働きに出ない者は、一人前の男女にみられず、いわゆる経済的に恵まれた分限者の家でも、行儀見習とか雪に埋もれているより、良い現金収入を求めて出ていった。そして、雪が消え農作業の始まる四、五月ごろには戻り、他家の奉公や自分の家の作業に取り掛かるのであった。

この出稼ぎには、「酒造りや店員・女中と又は夜なきうどんやなどであった（中略）明治元年頃生れの人か

らよく聞いたもんですが、竹野に汽車が付く迄は、四日間歩いて行ったそうです。竹野を出て、出石の奥の矢根に一泊、次が福知山の園部、そして京都に着き、四月になれば又歩いて帰ったそうです。私等の時代には、もう汽車が走って居て、京都二条の駅迄二円三十七銭で、あの煙のもうもうと出る汽車であった」（「思い出のこ  
と」土生田富  
曹、第十七号）とあるように、女性なら飯炊き・子守・機織り・女中、男性は伏見の酒屋（但馬杜氏）・うどん屋・商家・飲食店・豆腐屋・餅屋・豆屋などであった。また、三重県の伊賀上野方面での製紙（銅山）、和歌山へのみかん摘み（三原・桑野本）、丹後ちりめん女工（宇日）などもあった。

秋の新米の穫れるころはまた、このように出稼ぎに出かける時期でもある。「秋のコト」（別れコト）と称して、餅を搗き新米で祝い、出稼ぎの無事と別れを惜しむのである（第二節農業参照）。出稼ぎにいく者は、近所や残された親や子供が世話になる人に挨拶をして、氏神へ留守家族の無事と京で良い奉公口と無事を祈り出立するのであった。留守宅でも、我が夫・娘・息子のことを心配し、元気で暮らし無事に帰郷するよう、一月十日「京行き日待ち」と称し奥須井では祈ったという（「昔から伝わっていた行事」宮  
田権四郎、万年前書、第六号）。浜須井でも、「京日待ち」という休みの日を作って、京阪神へ娘を出した家が、順番に集まって娘のことを話し合った（「但馬傳書」兵  
庫県教育委員会）。また草飼においても、京飛脚であった仲治甚四郎家へ、留守宅の者が米を持ち寄り、「豆腐飯をこしらえて無事息災を祈ったという」（「遠く離れた草飼の  
生活」花房善代次）。

このように、お互い思いつ思われつ、家族を生活のためといいながら引き離れた出稼ぎ奉公も、割合地元労働の機会や副業にも恵まれるようになり、兼業化とともに次第に減少していった。

最後に、三原の田村寿子氏（大正二二年生）（二九一三）の出稼ぎ奉公（京行き日待）の苦労話を紹介する。いつの時代も、

貧しい庶民の苦勞は大きい、この苦勞を耐え抜いてきた先人に、我々はただただ敬服するのみである。

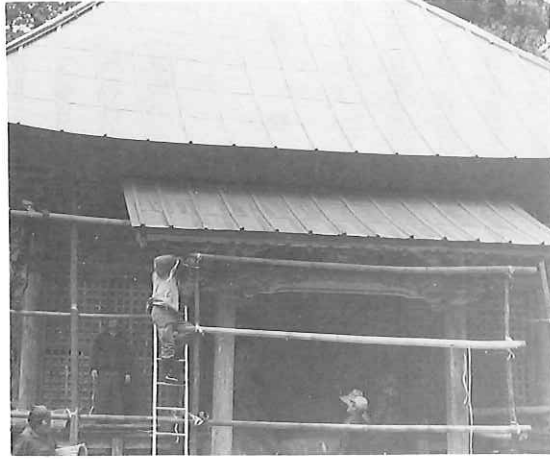
私は数え年十六の年の秋、京都市今出川の西陣織物工場に飯炊き女中として勤める事になりました（中略）今の中学三年の年です。朝の四時に起きてのご飯炊きは、決してなま易しいものではありません。特に厳寒期の誰も寝静まっている夜中に、ただ一人で水仕事をする事は、とてもとても辛い事でした。手はあかぎれだらけです。湯も使わずに水で米をとぐのです。その冷たかった事、もうやめて家へ帰ろうか何度思ったか知れませんが、でも私は耐えました（中略）先頃テレビで上映された「おしん」にも劣らない様な毎日でした。一家の食事が終わり、一番最後に女中共の食事が終わってあと片付けを終わったら、後は私の自由時間でしたが、エプロンや足袋の繕いも毎晩の様にあり、ろくろく家への手紙も書けないまま、昼間の疲れでぐったりと泥のようになって眠るのが毎日の私でした。

（「私の少女時代」  
「万年書」第九号）

日 役

村の住人として、村落生活を続けていくためには、家を単位とした相互扶助的な共同労働が課せられた。後述の罫網の分配で紹介する地引き網の作業も共同労働に入るし、明治三十年（一八九七）ころ、阿金谷・須谷の村民が二日ばかりで、雉追いをして、これを雉飯にして食べたという。これも、共同狩猟を行ない獲物は平等に分割するというものである（「八十七年前頃の三歳児からの思い出」谷垣佐衛門「万年書」第七号）。

こうした村の仕事、村日役・村賦役（ふんぎ）と呼び、年に一〜三回前後の回数で、大体八月に行なわれ、お盆後の十六日が目立つ。一軒の家から一人出るのが原則で、正月の会合に日役の内容を報告し、次の日役について相談された。ちなみに、この日役はいわゆる所帯を渡す時、村の寄り合い・寺役とともに譲ることになり、家・



写68 寺の村日役（雪囲い作り、轟・蓮華寺）

村にとって大切な役目であった。ゆえに、学校を出る十五〜十七歳ごろになると、若衆組に入り名替えをすると、小さくても日役が付いたと称し、一人前にみてもらえた。

それでは、床瀬・下村・段・銅山・三原・川南谷・桑野本・須野谷・門谷・河内・御又・小城・森本・林・芦谷・須谷・切浜等の日役内容の聞き書きをまとめてみよう。

これには、道路（農道・山道・林道）・雪道・河川・井堰・用水・橋架け・植林・氏神・寺院・堂・地藏・共同墓地などの日役や（写68）、特例として、葬式・結婚式・災害・建て前・祭礼・左義長で、中食と酒が出るが多かった。特に降雪時に、村民総出で主に通学路の除雪作業の日役は大変苦勞をしたという。

また、この共同労働で特筆されるものに、「手間ガエ（替え）」と称し、本家―分家、親方―子方、友人等心安い人々を一組として、お互いに仕事を手伝い合うことである。特に田植え、屋根の葺き替えなど、一時に人手が大勢必要な時、無賃で労働を提供し合うもので、ぼた餅とか赤飯を出したという（小城・段）。

こうした日役には、小城のように男女の差を付けない所もあったが、仕事の内容により昭和二十〜三十年（一九四五〜五五）ごろまで男女の差があり、余分に賃金を出したという（森本）。また、河内では女性は男性の



八割の日役日当であつたという。なお、欠席の場合は、一年に何回欠席したかお金で支払つた（門谷・三原の場合日役日当三〇〇〇円）。床瀬の場合は、賦銭割り（賦銭割り）と称し、益・暮に日役賃を負担した。一日の欠席で、二日出る労力分の日役賃が課せられた。また、正月の会合とか村の行事に、欠席した時の不義理を品物・金銭で補うこともあつた（須谷）。

田久日では、漁業組合主催で益の十六日と春三月に、組合員単位（組合員単位）の浜修理の労役が課せられる。代理人の場合の女手・老人には、二〇〇円を追徴することになっている。浜須井でも、男手は二〇〇円、女手は一五〇円と計算し、年間を通じてバランスの取れるように清算した。かつては、老人の出役は六十五歳以下に限っていたが、現在は年齢制限を廃している（『但馬海岸』兵、庫里教育委員会）。特に興味のあるのは、坊岡で明治初期まで実際の養子とは異なるが、「養子親」といい、労働力を提供した事例も聞かれた。養い児養子の崩れた形であらう。

#### 分 配

前節共有地と占有地の箇所（箇所）で、小城の村共有の持ち山賃金を軒割りに分配することがみられた。門谷では昭和三十年（一九五五）ごろまで、焼畑で火を入れる時、「山分け」といつて分配した。その時、村民は石の無い良い所を希望したというのも当然であらう。

竹野谷で一番特筆すべきは、鰯網の分配である。鰯が沢山浜の方へ入ってくると、蛇々山（用見山）の番小屋の者が、「おーい、おーい」と呼び、旗を振りながら西・東へと合図をした。男も女も子供も網を引っ張り、「ねいよ」といつて手間賃として、簀（あじか）（竹で編んだ籠）一杯に鰯を貰つて帰つた。沢山獲れると肥料にもした。また、子供も含め、この引き手の一人一人の名を書き留め、「かこわり」といつて網引き手間賃が支払われたこともあつた（『大正初期の浜の子』北条正次、「七十年前のいわし網」垣谷伊勢松、「万」）。

この鰯網制度は、浜須井では、江戸時代の元禄（一六八八—一七〇三）ごろより、既に漁船と鰯網を所持する網親奥野家が、村民を引き子として組織していた。これには、この総本家奥野家を中心とする奥組、分家の隠居組に分かれ、明治期に入つて両組に属しない村民による新組とがあつた。こうして、この三組が籤を引いて交代しながら出漁した。鰯網は、春三月岩瀬山（俗称鰯山・鰯呼場）に見張りが立ち、海の色を変えるほどの鰯の大群が押し寄せると、「オーイ・オーイ」と声を上げる。当番組の漁師は、直ちに舟を降ろしアラ手・網を積み、網打ちの用意をする。そして、湾内に地引き網を打ち、組中総出で網を引いた。収獲物は、斗桶に入れて各戸均等割りにするが、網親だけは一戸割り余分に多く取つた。これも、昭和三十年（一九五五）代に地引き網の廃止とともに消滅した（「須井の鰯網」土生田富治、「万年青」第十四号、「竹野浜漁業」組合創立と沿革史、伊垣善四郎、「但馬海岸」兵庫県教育委員会）。切浜でも、「鰯あげ」といって、村を上・下に分割して、順番に見張りを立て鰯を収獲したが、当番は倍貰えたという。

## 第四章 交通・運搬と交易

### 第一節 総 説

「山坂越えて、宇日・田久日。見たか聞いたか、恵日・金原。」

これは、竹野谷の交通がいかに不便であったかを代表した言葉である。総面積の九〇パーセントを山林がしめ、海と三方を山に囲まれた竹野谷を、かつて人々は「陸の孤島」と称した。また、冬の積雪時期になれば、一層困難を極めた。しかし、陸の交通に代表される道は、竹野谷では細道と峠・坂・雪道であった。こうした急峻な道を越えて、人と物・文化・情報が運ばれたのである。

いっぽう、竹野浜を中心とする海岸地域では、昔から北前船・廻船による海の交通が盛んであった。しかし、大阪と北海道を股に掛けるような大型船はわずかで、殆どは中・小型船で、近海の港を行き来していた。この代表が、三〇石積船の「石船」で、講・組合が組織され、浜の中心的運搬船となった。また、昭和初期から機帆船も出現して活躍したが、終戦後次第にその姿を消していった。また、川の交通では、竹野川に材木を流して運んだり、鰯を売る川船が上って来たという。

こうした交通は、人の移動とともに、物資の移動でもあった。この運搬手段に、人力と畜力があるが、平坦地の少ない竹野谷では、早くに肩担い・背負いの人力運搬が多く用いられ、峠・坂道を大変苦勞して運ばれた。

冬の積雪時には、橇こぎ運搬が主となった。また、畦道などに使用する一輪車も出てきたが、後に道路が整備されると、大八車・二輪から三輪、そして四輪と変遷した。なお、畜力運搬は、牛・馬が中心で、馬車引きが目立った。こうして、陸・海・川を利用して、人力と畜力によって、いろいろな地区に運搬された物資は、直接または貨幣を媒介として交換された（物々交換）。こうした形態は、市・行商・買い出しなどに分けることが出来る。

陸の孤島といわれた竹野谷にも、四カ所市場の小字名こまなが残っているし、峠・坂道を越えて、たくましく行商人が来たり、行商に行ったりした。また、生活必需品の買い出し（町行き）も、道路・交通機関の完備していない時、大変な苦勞であつて、一年に一、二回ほどが精々であつた。これを補うのが定便じょうべんといわれるもので、小荷物や通信物を運送配達していた。交通の便が悪い所では、大変重宝がられたという。ともあれ、奥行の長い竹野谷で、南部の床瀬・中村・下村・銅山・段・三原の各地区では、豊岡・日高と峠越しとはいいいながら、やはり地理的に近接している関係上、交通圏・生活圏・通婚圏などがより密接であつた。

現今、めざましい交通網の発達で、竹野谷の隅々まで道路も整備され、自動車も自由に行き来出来るようになった。しかし、逆にこれが一層過疎化に拍車をかけた。道（交通）は、文化・経済・情報であるともいわれる。人々は、これ等を都会に求め、どんどん出て行ってしまふ。が、また入つて来る可能性もあるわけで、新鮮な活力に満ちた若者の定着化が待たれる。過疎と過密、このアンバランスは、一つはこの交通（道路）に起因するところもあり、地方の活性化ということで、新しい未来に向けた、緻密ちみつな交通対策が望まれよう。

第二節 交 通

陸の交通

竹野の総称を竹野谷というように、奥山から流れ出た竹野川は、両側を険阻な山々に挟まれながら、竹野浜の大海へ注ぐ。道らしい道はなく、他地域に移動するのにも、人馬も通らない細い急峻な谷・坂・峠道を越さねばならなかった。乳原三好氏〔一九〇一〕（明治三十四年生）も、「小さい頃の三椒村の道は、昔ながらの小道で、やっと一人が歩けるほどの細い道が、山を下り谷をつたい、山すその曲りくねったもので、荷物を背負った人とすれちがうのが難しいような道」（「下村の昔・今の思い出、ホソギ神社」、『万年書』特集号）であったと述べている。

第(1)に峠道を見てみると、竹野地区の海辺の村々の交通も、海上航行に依存することになるが、これも天候に左右されるものである。宇日では、一カ月に一度は海が荒れ、何かの時に出了船に便乗したという。特に、平家落人伝承のある田久日は、この典型的例証である。そこで、陸路竹野から田久日に行くには、昭和三十七年（一九六二）の北但海岸道路が開通するまで、青井谷から山を越え宇日へ下り、また山を越えて田久日の行路で約二時間かかったという。海面から一〇〇トイの絶壁の細い犬



写69 田久日から宇日への犬道（獣道、田久日）

道（獸道、写69）から、落ちて犠牲になつた人は数えきれないという。

中地区には、城崎―竹野を結ぶ重要な「鑄物師戻峠」（湯嶋峠、昭和五十年トネル貫通）・「荊谷峠」（明治四十四年山陰線開通によりトネル貫通）があり、京都方面への唯一の道で、京都への奉公人・職人・飛脚

等が頻繁に往来したという。また、市場からの「木谷峠」も、古来北陸と山陰地方を結ぶ最短陸路に当たつた。

南地区には、後述第四節交易で紹介するように、豊岡へ牛市・行商・買い出しに使用された「江野峠」（昭和二十八年トネル開通、昭和六十二年新トネル開通）も存した。さらに、三椒地区では、三原から日高へ行

く「水山峠」を利用した。昭和四十九年町営バス森本―三原運行始まる。これに関して、三原の田村源一氏（明治三十七年生）は、「水山峠」（另年書）で次のように紹介している。

子供の頃から、この峠ほど自分達に親しまれたものは外にはない。

国鉄の山陰線が開通するまでは、この峠は西気谷（旧西気村と清滝村）から佐津谷、香住谷に通ずる最も人通りの多い峠であつた。三原から東河内まで約六キロメートル、栗栖野（神鍋）まで約八キロメートル程の道程である。

大正の中頃県道に編入されたが、峠ばかりは修理、改善された事はなく、専ら三原と東河内両部落の負担であつた（中略）。それに、三原の奥山とこの付近から生産される木炭も多く、殆どこの峠を越させていた。殊に、大正六年に三原に農協が出来てから、日用品・雑貨・肥料・セメント・トタン類に至るまで、全部栗栖野から野（栗栖野から神鍋山、尻山の裾を通つて、かん坂の上に出る間道にこれを野といった）を通り、更に峠を越して三原に帰る。全部肩の上であつた。三原部落民にとっては、この峠を越える事は日常

茶飯事であったのである（中略）。

三原部落は、もと気多郡に属し、全戸が栗栖野の大円寺の檀家であり、且つ、太田部落の山田医師とは以前から特別の関係もあったとかで、あれやこれやでこの地域とは交流が深く、したがって、縁組も竹野谷よりも異常に多かった。

尚、長い間、栗栖野局の電報配達区域であり、電話も昭和四十三年に竹野町が二局化するまでは同局の区域であった。

小学校も、三原には高等科の併設がなく（奥竹野第一小学校Ⅱ森本Ⅱには大正十年併設）以前から西気小学校に通う者が多かった（中略）。水山峠も、いつの間にかやら廃道になってしまった。もう通れない由と、その交通・生活・文化・通婚圏の密接さが分かる。

なお、床瀬・中村など椒の人々の日高への道として、「太田越」・「青山峠」（昭和三十七年林道青山線工事完成）、豊岡へは最重要動脈路「番屋峠」（昭和四十四年改修工事完成）を越えて行ったものである。昭和四十九年町営バス森本～床瀬間運行始まる。

このように、床瀬・中村・下村・銅山・段・三原の各地区では、豊岡・日高と日常生活の上で強い繋りを持つていたのである。

第(2)として、坂があるが、代表的な話を一つだけ取り上げておこう。

切浜に「今坂」（写70）という急な坂があつて、荷物を積んだ鉄車を、五人で押すほどの重労働であつたという。「若いお嫁さんが、この今坂を越さなければ、ご飯をいただくことができない」といわれたそうで、下



写70 現在の今坂（切浜）

校の子供たちもよく手伝って、飴を御札に貰ったという（「幼少  
年の思

十四年生、米田運太郎、明治三  
十四年生、万年青、第七号）。なお、現在の坂は大分緩やかになっている。

第(3)に雪道である。近年は、世界的に温暖化現象で、積雪も

昔ほどではないといわれるが、裏日本の但馬竹野谷は、一昔前  
まで冬は大変であった。現在ではたとえ大雪に見舞われても、

除雪機械や消雪装置により、道路やその他の施設が麻痺する  
ということはなくなった。また、屋根に積った雪を処理する研究  
も進められているという。

さて、昔の人々の雪との戦いを少し紹介しよう。どこの家  
でも、雪が降り積ると、村中が朝早くから除雪・雪踏みをして、  
道路の確保にあたった。そして、一番に通学路を開け、学童の  
学校への往復の送迎人夫（日役）の役目が大変であったという。

ちなみに、川南谷区有の文書中、『雪中登校日役』・『除雪日役』・『雪道送迎人夫帳』など、大正十三年（一九二  
四）から昭和二十四年（二九四九）までのものが八冊蔵されている。こうした登校の様子を、「小学校当時の  
思い出」（朝日  
年生、万年青、第十号）に、

全員素足にぞうりばき。中には、わらじであんだ深靴をはいている者も居た。吹雪の中カサなんてない。

皆子供は着物を着、頭には丸いバッチヨガサをかぶって、家を出る時は首に結んでもらって通学したもの



です。ひどい風の時など、からだごと田の中へ吹きとばされた事もいくどかあった。とし、それでも学校は休まなかったと記している(写71写)。

第(4)として、信仰の道が挙げられよう。これには、子供の成長祈願に毎年旧四月三日に三川権現さんへ、桑野本越え・木谷越え・本見塚越え・門谷越えなどが利用された(写73)。また、気多郡八代郷大岡寺村の大岡寺(現・日高町山宮)へ、檀家である床瀬をはじめ、三椒村から祭礼などに多く参拝したという。なお、『通史編』(近世編、第七章第二節(1)「村を訪れた勸進者・宗教者」)でも紹介したように、近・現代にもいくらかの勸進者・宗教者が訪れた。「六十六部」・「淡島願人」(図21)・「出雲・妙見のお札売り」などで、出雲・



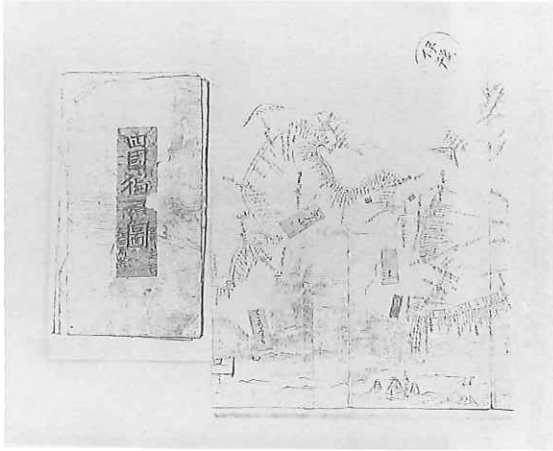
写71 草鞋・深靴・瓜子(段・小林重雄蔵)



写72 かんじき 標(段・小林重雄蔵)



写73 あざ 三川山と字シシブシの山との分かれ道と道標(元禄15年銘、桑野本)



写74 『四国偏礼絵図』(細田敬豊著、轟・細田昌蔵)

妙見は、各家から集まった米を換金し、次の村へと行ったという。

次に、『通史編』で触れるべきであったが、欠落したので、信仰の道とも関係あり、ここで「細田敬豊と四国偏礼絵図」を紹介しておく。轟村の大庄屋細田敬豊(周英)については、『通史編』(近世編、第五章第七節庶民の旅へ)お、ここの「四国遍路図」は「四国偏礼図」と訂正する)、第六章第三節竹

野谷の文化人と豪農の学問)で述べたが、画・書・彫刻・文字などを能く修めた多才な文人であった。また、旅をよくよく好んだ人で、毎年必ずどこかに歴遊していた。

この『四国偏礼絵図』(写74)は、宝暦十三年(一七六三)春、版刷り出版(文化四年再版)<sup>(二八〇七)</sup>されたものである。延享四年(一七四七)真念の『道指南』を参考にしながら、自分の足で順拝し、今までなかった四国遍路絵図(各霊場の道順や里数を詳細に図示)を作成し、遍路の手引きとなることを願い出版したと、同絵図に記している。これに関しては、既に前田卓氏著『巡礼

図21 河内を訪れた勤進者・宗教者風景(明治時代、『我古里』達富寿夫・河内出身)



淡島願人

六十六部

の社会学—西国巡礼・四国遍路—、近藤喜博氏著『四国遍路研究』で紹介されている。前田氏は、「これが四国霊場の地図として現存する最古のものであり、また最もすぐれた地図である（中略）各霊場の間に書かれてある里数はかなり正確である」として、高く評価している。

海の交通 第(1)に、北前船・廻船（石船）であるが、実際の体験に即した北前船の活躍と生活を紹介しよう。第三章第三節漁業で記した、北前船の乗組員であった伊藤五郎平氏等一二人から、昭和三十三年に聞き取り録音したものによる（竹野町教育委員会蔵）。

北前船が一番多く在った時の数。

大型—二五艘、八人以上（八〇〇石〜一〇〇〇石以上）。

中型—二五艘、六人〜五人ほど（六〇〇石〜八〇〇石まで）。

小型—五〇艘、四人以下（七〇〇石以下）。

船中の役付き。

船頭—船を代表する人物で実際の大将。

その他の三役（身分関係は厳しかったという）。

親司<sup>おやじ</sup>—船中諸道具の取り締り（水夫長—乗組員の監督）。

表衆<sup>おもしゆう</sup>—港に入る場合に号令を下す（航海上の一切の責任を負う）。

賄<sup>まかない</sup>—給金の分配をする会計（事務長—積荷に対する一切の受け渡しをする）。

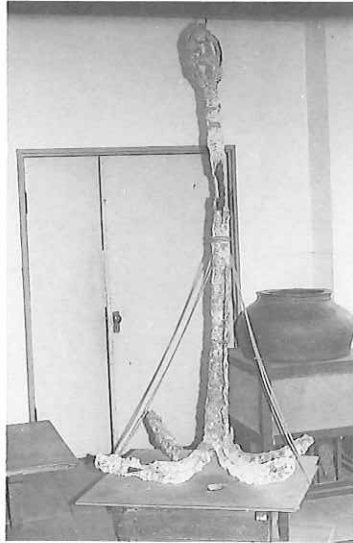
水主<sup>かこ</sup>—普通の船員。船乗りを希望する者は、十二、三歳のころから乗船し、食事当番となって航海技術を

学んだ。十四歳の年で、給金が往復で二七円、一カ月働いて五円であって、当時の一俵の米が一円六〇銭の相場であつた。

それでは、大・中・小型の船は、いつごろ出帆し、どの方面へ行き、どのような荷物を運搬したのであろうか(写75)。毎年正月二日が乗り初めで、十一日が船祝いとなっていて、親戚・船中が招待され、歌や談話で慰め合つた。そして、船主たちは新春早々故郷を立ち、陸路大阪に向かった。そこで、前年の秋に船囲いをしていた船を整備し(竹野浜は、港が河港<sup>かこう</sup>であつたため、小型の北前船は、竹野港で浜岸に陸揚げして年を越したが、大型の船はわざわざ大阪港まで回送して冬を越した)積荷を仕入れたという。

大型―春三月十日ごろからそろそろ出帆し、大型船は大抵出雲の境(現在境港市)へ行き、鉄・綿を積んで新潟方面へ下る。新潟で荷揚げして、米積みに変えて、北海道方面の江差へ行くのが常例となつていたという。上積みには、鰹節・砂糖・鱈<sup>たら</sup>を積んで新潟・能登の方へも行った。

中型―材木を竹野から積んで、筑前の博多方面へ回り、帰りは塩を積んで、竹野または丹後・越前・加賀・能登の方面へ持つて行った。



写75 北前船のものと思われる錨  
(竹野浜海岸にて発見、元竹野  
小学校蔵、現在保存不可能と  
なり廃棄処分)

小型―隠岐・因幡の国の米を積み、三月の金毘羅さん（十日）が終わってから出て行くのが常例になっていた。小型の北前船は、石船と呼ばれ、木材・沖繩の石材等を積んで、隠岐・能登方面へ運搬するものが三〇数艘もあったという。

以上が大体三種の活躍の特徴であるが、もう少し大型の活動を紹介する。

航海は年二回ほどで、北海道から上ってくる時は、鯨・数の子を積み、魚粕（肥料）を満載して下関・瀬戸内海へ乗り込み、備後の尾道・玉島まで入る。下りは、そこから周防の三田尻の近所から塩を積んで、新潟の方へきて、新潟から米を積んで、函箱・江差の方へ行く。こうして二回を終えたなら、旧の金毘羅さん時分（十一月十日）に、大型は大阪に困う船もあれば、但馬の方へ帰ってくる船もあって、いろいろである。日本海は、秋・冬になれば荒れ、航海は不可能となり船困いをするにしている。いっぽう、年に一回の場合は、北海道に到着するのは大体五月下旬ごろで、ここで漁獲物などを仕入れる。八月下旬に大阪に向け出港し、九月下旬に瀬戸内海に入り、十一月上下旬にかけて大阪へ戻る。大阪で荷物を売りさばき、再び船困いをして故郷に帰ったという。

こうした航海は、風により自由の利かない場合もあり、それは流れものの船のようで、一〇日も二〇日間でも寄港することが出来ない時があった。その折、水を切らし夕立の時に雨水を漉して飲んだこともあったという。また、越前の若狭に入港した時、船員たちが禪一つで木遣唄を歌いながら、荷降ろしをしていると、問屋の娘や女中が見物にきて、随分活気のあるものであるという。

船稼ぎは、「運賃積み」ではなく、皆「買積み」ばかりであった。積荷に対する利益は、大抵三割ぐらいで、

一〇〇〇円の資本金が大型船で一年に二〇〇〇円の利益を上げたという。また、大型船で一航海すると、千両箱一つということもいわれ、「金が欲しければまた貸してほしければ竹野へきなさい」と豪語し、蔵の二階へ上るのに、金箱を梯子にして上ったということを知くほど大儲けをしたという。そして、船乗り以外の所へ嫁に行かせぬという家訓があつたくらいで、親方も冬になれば村へ戻り、随分はぶりがよかつたようである。

次に、若い時より船方船頭として乗船した竹野浜の大谷松造・沼田亀太郎・竹森茂夫・米田一・福田寅造の各氏の話を紹介する（竹野・松本周平氏報告）。

帆船の航海は、潮流風向きに支配され、無風が幾日も続くと潮に流され、目的方向の反対に走り、長期の航海になることもしばしばであった。しかし、順風・追潮時には約二ノットの速力が出たこともあつた。航海は、沿岸よりかなり沖合を帆走し、船頭の操船術とともに、磁石・星・海図（手書き）等により行なわれ（写76）、港の確認は海図による山姿図に大きく依存した。乗員は、船頭・船方・炊（かま）（船方の中で選んだ炊事係）で構成されていた。飲料水は多量に積んだが、航海予定日数不安定なため、特に節約し、食料は米・麦・野菜・へしこ（塩漬け魚）・大根の漬け物・味噌・醤油等を積んだ。現在、竹野町の何軒かの家庭で茶粥が賞味されているが、北前船が残した代表的食文化の一つ



写77 船茶釜とランプ  
（竹野町教育委員会蔵）



写76 和磁石と遠眼鏡  
（馬場町・福田正辰蔵）

と考えられている(写77)。

なお、冬の休船期には、船の修理、繫留網を作ることもあった。網には、お綱(日本麻)・藁綱(稲藁)・つぐ綱(棕櫚)・と綱(中国産藤)があった。各船には必ず命綱と呼ばれる強靱な綱が備えてあり、女性の髪の毛を材料として作られたものもあった(竹森茂夫氏(明治三十二年生)<sup>二八九九</sup>)は、越前敦賀港で若い時みたという)。ちなみに、東本願寺にも諸国の女性信徒の頭髮で作られた太綱が保存されている。これは、明治時代大師堂再建に使用されたものといわれる。

さて、以上のような話を報告した五名の中の一人米田一氏(明治三十三年生)<sup>二九〇〇</sup>は、「若い時の思い出」(『<sup>青</sup>第<sup>六</sup>号<sup>第</sup>』)と題して、さらに詳細にその体験を記しているので、例記する。

荷物は、須井より木炭や割木や材木を積みます。冬中、須井の人を頼んで製造してもらい、春になったら、丹後の浅茂川まで運搬致します。

昔は、青井より家の下に敷く切石が沢山製造され、それを船で豊岡や若狭の小浜方面に運搬しました。奥竹野からも竹材が沢山出るので、奥の人に切ってもらい、若狭の小浜に運びました。小浜は「はし」を沢山製造しますので、竹材がよく売れました。

二十三歳の春、船を新しく製造しまして、父と二人で隠岐の国や出雲の松江方面へ、石や材木を積んで通いました。

隠岐の国に材木積みに行きました。一度行くと材木を製造するのに、二〇日もかかりました。それを積んで、丹後浅茂川に売りに行きました。

次に、石船をみる。石船とは、青井谷の青井石を船で運ぶ「石運搬船」のことである。この青井石については、第三章生産・労働と分配第十三節諸職の青井石工で既に触れている。

『廻船西組講』（竹野・松本周平・小林政春・万戸茂治代表）の史料中、江戸末の文久三年（一八六三）正月十一日の『石船中間帳』が存し、既に石船の活動があつたことが知れる。以後、年代が不詳であるが、『石船廻船西組講』・『石船組』・『石及板材木運賃記』・『竹野石材販売合資会社』に、「石船」・「石材」とみられるので、竹野の中心的運搬業であつたのであろう。

『竹野郷外史』(二)は、「船は底の平なもので、千石船と全く違った船の構造であつて、遠距離といえは敦賀・隠岐国・石州あたりであつて、近くの因幡の賀露・香住・豊岡・玄武洞位に石材を運び、帰路には敦賀の石灰・梅干・ばつ丁傘、因幡の米、石州瓦を運んで帰つて、往復共に売買をし、同時に次の注文を受けたのである」とし、石船の最盛期は明治三十年代（一八九七―一九〇六）で三七艘もあり殆ど三〇石積船であつたという。そして、弁天講を作り、正月寄り合いをして、船賃・船方の給金などを取り決めたという。この時の講員は、三七名となつていたが、昭和三十七年（一九六二）石船業はその歴史を閉じたと記している。この「弁天講」については、前掲第三章第三節漁業―海の信仰―の「海と黄帝信仰」で触れた。つまり、「廻船西組講」の史料から、明治中期黄帝講から弁天講へ改称して、黄帝信仰から弁財天信仰に変更したことが分かる。

また、今までたびたび出てきた「西組」についてである。竹野の竹森茂夫氏の教示によると、竹野の廻船は、竹野川の東側の村を対象とした「東組」と、西側の村を対象とした「西組」に分かれていたという。そして、途中西組の人員が少なくなり、下町を東組から離して西組に含めることとした。この合併の年代は、昭和十年

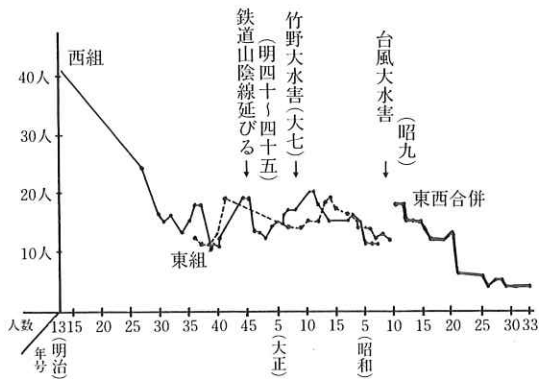


(一九三五) 一月の『東西合同記念船舶組合弁天講諸入費帳』から、「東西合同記念」とみられることや、『東組小廻船舶組諸入費帳』(大正六年二月)<sup>(一九一七)</sup>は昭和九年(一九三四)二月で、『西組小廻連』(大正十年十二月)<sup>(一九二二)</sup>は昭和七年(一九三二)で記入が終わっている。それ以後、十年からは『東西合同記念』の帳面だけで、消滅までの記入となっているので、以上の「廻船西組講」史料から、昭和十年に東西組が合併したものと思われる(表2参照)。

なお、この「廻船西組講」の史料をみてみると、「小廻連中」・「小廻船中」・「小廻し船組合」と多く出てくる。また、前掲の竹野町教育委員会蔵の録音でも、「小型の北前船は、石船と呼ばれ(中略)三〇数艘もあった」といっているように、三〇石積程度の石船を中心として、近港を運搬していたのであろう。これは、『通史編』(近世編、第四章「竹野浜と北前船」、論文編「北前船海難の一研究」)でも述べたように、江戸時代も同様で、一部を除き竹野浜の廻船の大勢は、近海で活動する小・中型船であったといえよう。

このように、竹野の先人たちが荒波を越えて、日本の各地を渡り活躍した様子がいささか判明した。人・物・文化の交流に重要な役目を果たした竹野の廻船も、鉄道網の発達により、自然に衰微していったのである。そして、昭和初期より機関を付けた「機帆船」も、大資本でない故、終戦とともに次第に消えていった。

表2 近・現代竹野浜廻船講・組合人数変遷表  
(「廻船西組講所蔵史料」より作成)



第(2)の客貨船であるが、前掲陸の交通でも紹介した如く、竹野地区の海岸交通は、大変不便で困難であった。そこで切浜村では、海路漁船の便で、人・貨物を運搬したという。明治四十五年(一九一三)の『郷土史編纂

誌』(郷土編纂取調)は、

(書切浜区有)

陸路ノ交通極メテ不便ニシテ、徒歩若クハ箱欠カ駕ニテ交通スルノミ、決シテ車運ニ適セス、依テ、古來旅人ノ多クハ、当村ヨリ海路漁舟ノ便ヲ得テ、近クハ相谷村、遠キハ余部浜坂若クハ因幡方面へ達スルヲ得タリ、当村ハ右ノ客貨ヲ運搬シ、以テ公衆ニ対スル交通機関ノ一部ノ補助スルト同時ニ、一方特別収入ヲ得シモノナリ、即チ一日二戸宛舟番ト称へ(俗ニ人卸シトモ云ヘリ)、今茲ニ当時ノ賃金表ヲ示セハ左ノ通り

後、諸物価ノ騰貴ニ伴ヒ、下記ノ通り改正、

相谷村へ	六銭	一〇銭
訓谷村へ	一八銭	三〇銭
柴山港へ	三〇銭	六〇銭
一日市村へ	六〇銭	九〇銭
余部村へ	一円五〇銭	

とし、漁船として、交通機関として、そして運賃収益をも得ていたと記している。

### 川の交通

釜石かまいしは、古くから水陸の要所で、竹野川の舟着場もあり、釜石の山端に刻まれた観音像は靈験が著しく、交通安全の守護仏とされている(写78、「松本部落周辺の地名を訪ねて」。ちなみに、舟を

大木本浅造「竹野郷外史」四

繋ぐための丸太木を差し込む人工の岩穴が残っていて（写79）、大正年間（一九二二―二六）まで利用されていた。例えば、大正十、十一年（一九二一―二二）ごろは鯛が多く獲れ、釜石の所まで舟で売りにきた。それを買い入れ、腐らせて山の柴を刈った田の中に入れて肥料とした（「私の歩み」同上）。また、後述の畜力の箇所でも少し触れるが、明治四十年（一九〇七）ごろ郡道が出来、荷馬車が通うようになるまで、材木を運ぶのに「板搬流し」と称し、大水の時川に流して下流へ運んだことも行なわれていた（「下村の昔、今の思い出、ホソギ神社」乳原）。

### 第三節 運 搬

運搬とは、人力・畜力・自然力が利用され、いろいろな運搬具を使いこなしながら、効率よく安全に物資を、ある地点からある地点へ移動させることである。

#### 人力運搬

第(1)に、これは最も原初的単純な方法で、人力で支えながら運ぶものである。頭上運搬・肩担い運搬・背負い運搬・腰下げ運搬・手提げ運搬に分けることができる。調査の結果、竹野谷で一般的によく使用されたのは、肩担いと背負いである。

この中で、代表的なものが、弾力性のある棒類を利用して、間接に荷物を運搬する肩担い運搬である。特に、棒の両端に肥タンゴ・水タンゴ（小タンゴ＝桶）



写79 川舟繫縛木の岩穴（竹野）



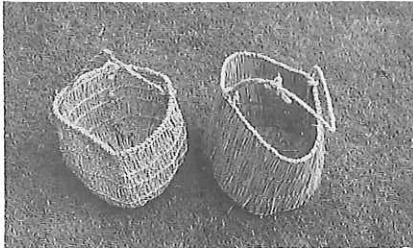
写78 釜石の観音像（竹野）



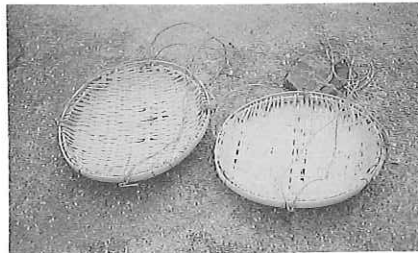
写80 天秤棒・担い棒・オイソ (段・小林重雄蔵)



写81 サス (段・小林重雄蔵)



写82 フゴ (森本・大野貞紀提供)



写83 パイスケ (籠) (葎)

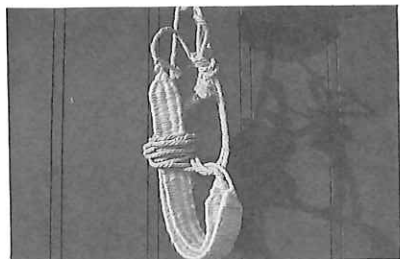
などをぶら下げて使用する天秤棒・担い棒(桐の軽いもの、写80)、両端に稲・麦・藁・草などを束にして、両端の尖った棒で刺して肩に担いで運ぶサス(写81)がある。また、二人で棒の中央に荷を吊すサシアイ棒(サシ担い・中とり棒)には、少し太く長めの担い棒が使用され、箆・長持・石土などを入れる畚(もっこ)・パイスケ(籠)など、比較的重い物を運んだ(写83)。

次の背負い運搬は、最も多く用いられる運搬で、オイソ(負い)(特に主として女性が用い、携帯に便利で、稲・草・柴・屋根の茅を運んだ)、オイコ(負い子)(特に主として男性が用い、炭俵・割木などを運んだ)があつて、それぞれクッションの役目をする背中当ても着けた(口絵写真参照、写84・85)。

また、腰下げ運搬として、コイゾ(腰)(コシズ)があり、腰に着け踏(ふ)とか(わらひ)・薇(せんまい)などのちよつとした物を入れ運んだ(写86)。袋が一杯になると、口が閉まるようになって便利であつた。

第(2)に、荷物の重力による抵抗や摩擦力を、道具などによって減少させ、人力によって運ぶもので、車・櫓(そり)・船などがある。これには、大八車(車力といつて、この大八車などを引いて荷物運搬を業とした人もいた)、一輪車(小丸・門谷)・木車(大森)といつて、木の輪の猫車(阿金谷)があつた。この阿金谷の猫車は、大正四、五年(一九一五〜一六)ごろ、ここで鉄が採れ、島根県からきた鉄山師が宿泊していて、これを伝えたという。幅四〇〜五〇(センチ)、長さ一五〇(センチ)ほどの木で作つた一輪車であつた。箱の前部に車輪一個を付け、柄を後部につけてきて押して行くものである。土砂運搬器の一つであつて、狭い畦道(あぜ)などを自由に通れるので、大変便利なもので、大・中・小があつた。

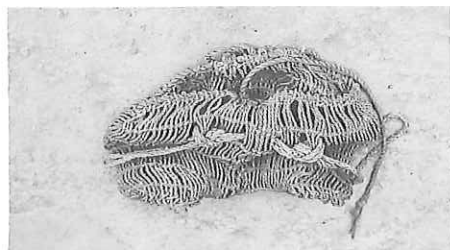
その他、リヤカー(写87)・人力車・ラージ自転車や、特殊なものとしてトロッコ(小丸、昭和九年)(一九三四年)、積



写84 オイソ (森本・大野貞紀提供)



写85 背中当て・尻当て (段・小林重雄蔵)



写86 コイゾ (コシズ) (森本・大野貞紀提供)



写87 リヤカー

雪時の橇そりがみられた。

前掲(1)の人力で支える運搬も、こうしたリヤカー・一輪車の普及により、次第にこれにとつて変わつていった。なお、こうした車に使用された車輪も、最初は木輪(明治四十三、四年)↓鉄輪(一九〇一、一九一)↓ゴム輪(金原)↓空気入れゴム輪へと変化して、二輪から三輪(三原は昭和二十一年に、川南谷には三十二年に入る)、そして四輪(林では昭和になつて入る)へと時代とともに変遷していった。

いっぽう、山林の多い竹野谷として、銅山では地車(横三〇メートル、縦四〇メートル)ほどの木で作つた小さく高さの低い車(中央に穴があいている)に、山で伐つた材木を載せて運ぶものがあつた。載せた材木の前(馬を繋いでおく)、椽金(とらがね)という鉄の環を打ち、それに藤葛を通し人力で引つ張るのである。ちなみに、「地車」とは高さが低く、地面に付くからこつ呼ぶともいわれる。

以上のように、山・谷・峠・坂の多い竹野谷では、人力による物資の運搬も大変であつた。三原の田村源一(一九〇四)氏(明治三十七年生)も、「車のない時代である。村の人は誰もが男は担ぐ女は背負う。これが当時の生活なので、勿論私も同様であつた。一人前の荷が担げなかつたが、明けても暮れても殆ど担ぐ事の連続であつた」(「少し昔のものがたり」)と記し、セメント・肥料・炭・桑の木等を肩に担い、女性も背負つたこともあつたという。(「方年昔」第十二号)川南谷でも、火災の場合は、手押しポンプを坂の下まで担いで運んだり、家の建築の時、材木・瓦を担いだり負つたりして運び、非常に苦勞したという。

現在、子供の体力が低下(中)、中高年層の方がむしろ強いといわれる。人は、しっかり土に足を付け、自分自身の力で身体を動かさなければならぬことへの警鐘であらうか。

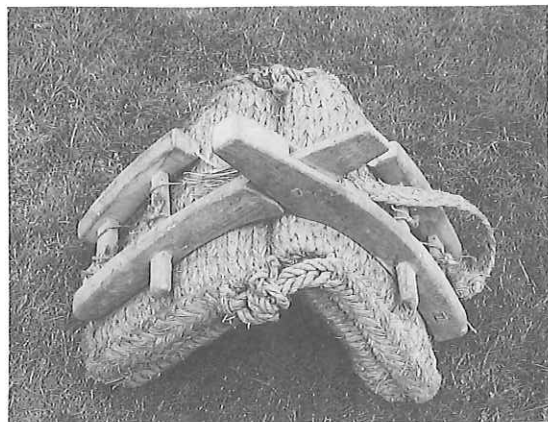
ともあれ、ここに人力ということ、昔のゆったりとした時代のほのぼのとした情景を一つ紹介しておこう。花嫁の私は、鉾山の役人さんを運ぶ客トロ口といって、屋根のついた箱トロ口で運ばれました。細い県道の左側に、トロッコが通る二本のレールが駅から鬼神谷の奥まで延々と続いておりましたが、トロッコは今の乗物のように、油をたいて動くのではなく、男の方が後から押して下さるものでした。小さな箱の中に母と嫁の私と髪結さんの三人が乗りましたので、高島田が屋根につかえるやら、それは大変でした。

（「八十年をかえりみて」安達寿賀）  
明治三十四年生、「万年青」第五号）

### 畜力運搬

これには、牛・馬が運搬に用いられ、往古からあったことは、『絵巻物』などでその様相が知れよう。牛・馬の背に鞍を乗せ、直接荷物を振り分けて乗せ運搬するのと、車を引かせて運ぶ方法があった。鞍は木製で作られたもので、鞍下くらもとは藁で編んだちよつとした民具である（写88）。

牛は主として、田を鋤くの利用され、運搬用の話は余り多く聞かれなかった。専ら使用されたのは、馬であって、馬力引きとか馬車引き、ベタ引きあるいは「牛車」ともいって馬を引かせた。戦争中までみられたようで、材木・炭・肥料・鉾山の鉾石を運んでいて、除雪もした。この馬方が、炭俵を積んで歌を歌いながら通るのを、田仕事を止め、鍬の柄の上に頸を置き、



写88 鞍と鞍下（森本・大野貞紀提供）



「エーエー声だ(であるなあ)」と聞き惚れたこともあったという(『我古里』達富寿夫、明。治三十年生、河内出身)。これも、当然道路が相当整つてきた上でのことである。大正初期、轟の竹野鉦山の鉦石を積んだトロッコを、竹野駅まで馬が引いていたという(『大正初期の頃の』子北泰正次)。馬車鉄道ならぬ、馬車トロッコともいえるようか。

自然力 これは、前掲川の交通で紹介した箇所(『下村の昔、今の思い出、ホンギ神』社乳原三好、万年書、特集号)、大水の時、板搬流しと称し、

運搬 材木を川の流れを利用して下へ運んだということが記されているが、自然の川の流れを利用した運搬方法であろう。同事例は、第三章生産・労働と分配の第十三節諸職、木挽で紹介したように、山の木材を川流して自分の家の近くまで運ぶということにもみられる。この木挽で関係するのは、小丸で「木馬(まうま、まうま)道(路)」といつて、山地で丸太(盤木)を敷き並べ、櫓(こ)に似た木馬に木材を載せ滑走させるものがあつた。木挽の人が使用していたというのも、坂の下りを利用し、木と木の滑りを応用した自然運搬であろう。

#### 第四節 交 易

市いち 市は、交易の主要な形態の一つともいえ、生産者と消費者がある一定の場所で交換取り引きを行なうことである。市立の時期から、縁日市(社寺の祭日・縁日)・齋市(さい)(定期市)・日市(毎

日)・大市(盆市・暮市・初市)一年一回)などがある。ここでは当然後述のように、買い出しに来る人や物々交換も行なわれるなど、経済的場であるとともに、いろいろな人々が大勢集まる人間交流の場でもあつた。

竹野谷では、魚市(写89)・陶器市(瀬戸物市・茶碗市)・牛市などがみられる。

椒では、盆とか不定期に、村内の道路上や広場で、豊岡・出石方面から来る「陶器市」が立(昭和五十七年調査、大野貞



写89 魚市 (竹野浜漁業協同組合)

市には、いろいろ店が出て賑わったという。出石郡地方で、こうした市に行く人のことを「イチンド」(市人か)といひ、子供たちが「イチンドイチンド、土産くれんか。土産くれんと通さんぞ」などと唱え、市に行く人を道で妨害し、小遣い銭をねだったという(『改訂綜合日本民俗語彙』第一卷)。

現在、竹野谷で小字の「市場」名が残っているのは、小丸(古市場)・轟(古市場)・坊岡(市場)・森本(市場)の四カ所である。小丸の山と里の境界点、須谷堰下の河原(扇状地)の古市場では、三〇年ほど前に

告報)。坊岡では、昭和の末ごろまで、奈良・滋賀から春・秋の二回、「茶碗のたたき」(叩き売り)が道の角などで店を広げていた。また下塚でも、春・秋「茶碗市」が玄関先とか広場で行なわれた。同じく、浜の元庄屋(与田明家)でも、春と夏富山から来る「瀬戸物市」が開かれている。

牛市では、かつて豊岡市の牛市に市場坂・さかの谷・芦谷峠・鋳物師戻峠などを子牛を連れて越したという。朝三時ごろ起き、一戸から二三人出て夜明けに峠を越したが、子牛が暴れたりして、進まず大変困ったという。この時、第三章第八節牧畜でも触れたが、子牛の頭に奇麗な布を付け、市に連れて行かれたという。家族同様に育てた牛を、手放す寂しさとともに、高い価格で売れることを願う複雑な心境であったという。この

芝居小屋が建ったこともあるというから、かつて交易の場所として栄えていたのであろう。轟の元、中竹野小学校前の田圃の古市場は、蓮華寺の祭礼・縁日に市が立ち、門前の村として出来上がっていったのであろう。また、坊岡・森本の市場は、香住の魚を消費地豊岡への運搬で賑わった、香住↓丹生地↓下岡↓本見塚↓木谷越↓市場↓市場坂↓豊岡という行路の主要地点であった。市場は、丁度中間地点で、交易・宿場・休憩地として発展し、年末・盆・節句などに市が立ったものと思われる。

以上のようにみてくると、市の立つこのような社寺門前・河原（此岸と彼岸の境）・交通の要所・村の広場と堂前などは、いわゆる特定の「場」・「空間」である。そこでは、祭りごとや芸能などが行なわれ、宗教者を含めいろいろな人々が集まってきた。つまり、神仏にかかわる宗教的聖なる場・空間に、こうした「市」が立つのである。それは、こうした海・平野・山の村落共同体の交換・交易を平穩無事になさしめ、多くの幸を与えられんことを願つてのことである（市の守護神である市神の存在も各地でみられる）。

### 行 商

行商には、竹野谷へ売りに来る人々、竹野谷から売りに行く人々が考えられよう。

第(1)に、売りに来る行商人であるが、地形的・交通的に何かと不便な当地域では、後述のようにそう再三買い出しに出掛けることは困難であった。こうした中、いろいろな行商人が竹野谷の村々を訪れた（表3）。この表をみると、魚売り・葉売り・反物売り・小間物売りが目立つ。我々も、かつて民俗調査で、このような所までと驚くほど遅く各地方を駆けずり回っている行商人に出会ったものである。

坊岡の旅館で同宿した富山の葉屋さんは、ここを定宿にして、しばらく滞在し、ここから四方へ葉の交換に行っていた。また、いろいろな家へ出入りしていることから、得意先の娘さんや息子さんの縁談話も時々依頼

表3 竹野谷を訪れた行商の人々

(各区の聞き取りより作成)

中	村	●	●	●																
銅	山				●															
三	原				●															
桑	野本				●															
大	森	●	●		●	●														
須	野谷				●															
門	谷	●	●		●															
河	内				●															
御	又								●											
小	城	●	●		●	●			●	●	●	●								
	林	●	●		●	●														
金	原				●															
東	大谷					●														
下	塚				●				●	●										●
	轟				●															
鬼	神谷				●															
小	丸				●			●												●
芦	谷				●			●			●									
和	田				●			●												
阿	金谷	●	●					●												●
羽	入	●	●					●			●	●								
松	本				●			●												●
草	飼	●	●					●	●											
浜	須井				●															
奥	須井				●			●												
区	行商の人々	反(呉物売)	魚服屋	煮売り屋	薬売	小間物売(雑貨屋)	煙管直し	鑄掛け	菰・箕	飯(丹後の籠)	飴売り	豆腐	茶碗	黒砂糖						
	どの方面から来たのか (判明する範囲)	竹野・豊岡	浜・佐津・香住・相谷・上計・訓谷・柴山		富山・岡山・奈良	豊岡		西気												

され、仲を取り持ったこともしばしばであったという。情報の伝達者であり、人と人との交流の役割も果たしたのである。

河内出身で、明治三十年（一八九七）生まれの達富寿夫氏は、八、九歳のころの河内を訪れた行商人を描いている（図22）。子供に絵舳を置いていった富山の「葉売り」、軍服姿で風琴を鳴らす「葉売り」、「荒物売り」、豊岡からの夫婦連れの「小間物売り」、西気からの「反物売り」、鍋釜の古い物と飴を交換する「じょうせん飴替え」など、それぞれ独特の売り声を出しながら村を回った。

子供たちも、田舎のことのみたこともない行商人が来ると珍しく、集まって周りを取り巻いたり、後ろを付いて歩いたりしたと記している。明治ののどかな物売り風景が<sup>まぶた</sup>瞼に浮んでくる。

第(2)に、売りに行く行商人である。これは、後述の買い出しの箇所で紹介する、床瀬の加藤とみ子氏（明治四十年生<sup>一九〇九</sup>）の体験にもあるように、買い出しの時、秋の収穫物を持って豊岡などへ売りに行った。農村では、浜のように行商組合を作って、常時他町村を回って魚貝類を売り歩いたことは少なかったようである。ただ、竹野谷の人が地元で大正初期には、梨・菓草履・草鞋を売っていたという（<sup>「子ら」北条正次</sup>「大正初期の浜の」）。また、須谷・御又・大森では、豊岡や城崎へ炭を売りに行ったこともあったという。



写90 移動スーパーカー



ともあれ、こうした行商も、現在では自動車による移動スーパーが（写90）、週に定期的に回ってきて、家に居ながらにしてどのような物でも入手出来るようになった。

買出し

竹野谷では、戦前まで衣食（味噌・醤油・豆腐・こんにゃく）は大体自給自足で、主食の米・麦、それに野菜は自家製であるから、一応の日常生活はしていた。また、前掲のように、市とか行商により不足品は入手出来た。しかし、これ以外の生活必需品も当然あり、正月・盆・祭礼などの冠婚葬祭の特別な時、「買出し」と称して遠出をした。

道路・交通機関の完備していない時期にあって、山・谷・坂のある竹野谷では大変なことであった。三椒村・奥竹野村・中竹野村などは、一年に一、二回ほど、朝早く起き一日掛りで、豊岡へ買出しに行ったという。自家収穫物を背に担ぎ、それを売ったお金で、衣料品・食料品などを買ったという。

御又・金原・和田・宇日・下塚では、竹野へも買出しに行ったように、御又では正月・盆・祭礼時の魚を主に買った。下塚は香住へ、奥須井は柴山へ出掛けたが、冬などは深い藁靴を履き、弁当を腰に下げ、風呂敷もんぺ姿、毛布を腰に括り、手で持つて被って行ったもので、その苦労の様子が偲ばれる。こうした買出しの苦労した様子を、床瀬の加藤とみ子氏が、「私の体験」（万年書）（第五号）に象徴的に記しているので紹介しておく。

床瀬から豊岡までの道程は、約三里一四町と聞いております。まず、床瀬から出まして番屋峠を越して、奈佐村を通り、福田・陰を通過して豊岡着です。

私たち若い時には、祭り・盆、その他用事が出来た時には、弁当持ちで、一日がかりで買物に出ました。当時、白砂糖一斤で三〇銭、こぶ二〇〇目ぐりりで四〇銭から四五銭ぐらいと記憶しております。五円も

あれば、色々たくさん買って帰る事が出来ました。又、秋になると田畑から収穫した大豆・小豆・米など力いっぱい背に負って豊岡に売りに出ました。

私も初めて先輩の人達から親切にさそって頂き、我身の宿命を胸に秘め、出る事を約束しまして朝早く起き、重い荷物を背負い、チョーチンを下げて皆と一緒に出ました。

長い道中、歩きながら世間話に花を咲かせ、歩き続けます。豊岡に着いて、やれ嬉しやと休むひまもなく、思い思いの買物に別れて行きます。

駅前の大丸飲食店に入り、ささいなおかずを買って弁当を食べながら友達と待ち合わせます。当時、小豆が一斗で三円、大豆一斗で一円五〇銭、米一斗で三円と記憶しております（中略）。

長い峠、急な坂道、疲れた足をかよわせながら頂上まで上り、やれやれ連れがあればこそ話し合いながら我家に帰って行きます。此の様な生活が十数年続き、終戦後間もなく豊岡から目坂までバスが着きまして、皆々大喜びでした。

こうして苦勞した買い出しも、現在は各家の自家用車で、どんな遠方でも出掛け、手っ取り早く購入出来るようになった。

#### 定 便

河内出身の達富寿夫氏が、明治三十八年（一九〇五）初めての最後にみたこととして、急いで手紙を持ってくる「飛脚」を当時に思い出して絵に描いている（図23）。明治三十八年といえは、明治も後期、そろそろ明治四年（一八七二）に成立した（飛脚廃止）近代郵便制度も整い、全国に浸透してきているころであろう。これは、私的なものであることはいうまでもないが、江戸時代の名残がみられ興味深い。



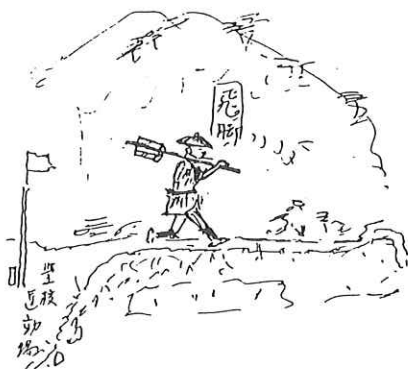
さて、こうした信書の送達とともに、物品の輸送がある。勿論これも、正式には郵便局やその他専門業者がいたが、「定便」<sup>じようびん</sup>（仲使い・便利屋）と呼ばれる人がいた。これは、依頼された比較的少量の荷物や通信物を、定期または不定期に配達するものである。竹野谷では、床瀬にみられ、交通の便が悪い所では、大変重宝がられたという。荷物とともに、いろいろ親しい人々の消息も彼等を通じて尋ね合い、私的ながらこそその温かみある人と人との交流が付属していた。

なお、『大正初期の浜の子ら』<sup>（北条 正次）</sup>にも、竹野から豊岡の定便をしていた家があったことを記している。昭和五十七年（一九八二）の調査<sup>（大野貞 紀報告）</sup>では、桑野本にも「ジョウビンサン」<sup>（定便）</sup>が年中活動していたという。

#### 物々交換

貨幣の媒介によらず、直接物と物を交換する素朴な「物々交換」は、竹野谷でも少しく採集出来た。いわゆる、戦中・終戦直後の食料不足による物々交換という特別な事例は別として、米・麦・野菜など生産する農民と、漁民の魚貝類・海藻などと交換するのが、最も一般的にみられる例である。竹野谷でも、海・田畑・山と三つの幸<sup>さち</sup>に恵まれており、自然発生的にこうした物々交換が行なわれるのは当然である。

図23 河内を訪れた飛脚風景  
(明治時代、『我古里』達富寿夫)



中村では、反物売りの紺のバッチ・ハンチャなどの藍染め、魚売り、煮売り屋（弁当の御数<sup>おかず</sup>）と、米・小豆・粟と交換したという。また、桑野本では、前掲の買い出しは、米で買ったがそれは米一升に鯖<sup>さば</sup>三本であったという。こうした交換比率は、場所・時期によって種々であろうが、大体において慣習的に成立してくるものであろう。下塚では、豆腐屋に豆を渡し、豆腐と交換するという、製作者に原料を渡し製品と交換するという、合理的な事例も出てくる。なお、椒・桑野本では、こうした米と衣類・日常雑貨の交換は、昭和五十七年（一九八二）ごろまで行なわれていたという。